小村氏学詠草

始

特105
551

帝國圖書館藏

くに子詠艸印行三百部を限る

此書其の第七十一號なり

北村寄贈本
大正 7. 2. 9 寄贈

歌集のはしめに

北村くに子では一寸わからぬかも知らぬが、日本橋の藝妓柳家つな子と云つたら、直ぐア、あの人かとうなづかれるに違ひない。

此の歌集は、つな子が御座敷のひま、御稽古の間に咏み出た歌の中から、只漠然と三百餘首ばかり抜き出したものである。つな子の咏艸は全體で三千餘首ある。書きとめてないのを合せたら五千首にはなつてるだらうと云ふ事だ。嚴密にそれを撰集する事は餘程の難事であるばかりでなく、いゝものばかり撰み出したのではつな子其人の面目を彷彿させる事が出來ないと思つたから、其間何等の基準も標的も定めず、單に無意味に、籤でも引くやうに抜き集めて見た。

從て玉石同架、薫もあり蕕もあり、一見甚だ蕪雜のやうではあるが、なまじ彫琢を施したものよりは此方が反て歌集上梓の旨意に適つて居ると思ふ。

つな子は此の歌で見てもわかるやうに、品のいゝ、優しい、親切な人だつた。鏡花の「日本橋」へ出て來る御守殿は、つな子をモデルにしたのではないかと云はれた程で、仲間の寄り合の席なぞへつな子が出て來ると一同覺えず居ずまひを正したと云ふ位だつた。然かし左樣かと云つて決して權高でも高慢でもなく、寧ろ御座敷なぞでは何となく人なつこく、春風徐に面を拂ふと云ふ具合だつた。氏も育ちも立派なもので、自然小さい時から善い敎育を受け、長じても餘り激しい風波にもまれた事なく、藝者には珍らしい程すんなりと伸びて居た。明治十五年八月日本橋の小網町に生れ、十三の

時新橋の玉廼家初代ぽん太の處から半玉で御披露目をした、藝名は友太と云つて居た。十四の時に日本橋へ來て柳家から出た、柳家の姐さんと云ふのが非常にいゝ人だつたので、可なり可愛がられて又可なり學問をさせて呉れた。十五で一本になり十七で鈴木臺水さんに引かされた。鈴木さんも親切な人だつたので、つな子の望むまゝに種々のものを勉强させてくれた。恐らく之れが一生を通じての最も樂しい時代だつたのだらう、つな子も常に當時を回想し、鈴木さんには滿腔の感謝を捧げて居た。

廿五歲で再勤し、廿六歲で柳家を繼承した。柳家を繼承してからは俗事に追はれて、以前の如く藝や學問にのみ沒頭して居る事は出來なかつたが、それでも好きな道とて暇さへあれば書を讀み歌を咏じて居た。歌は小さい時から松の門三草子の門に入り、國書も三草

子に就て研鑽して居た。藝者で源氏物語を全部卒業したのはまア珍らしいと云つても差支あるまい。同門中には今の尾上菊五郎夫人倉繁やす子、今の葭町三河屋主人鈴木靜子などがあつた。贈答の歌によつて調べると、徳川久子、麻布宮村町大久保樣御奥、牛込東五軒町櫻井敬長、日本橋檜物町福本まつ子、同濱町永井ます子、同榑正町松下とめ子、京橋南八丁堀原桃園、神田三河町宮島やす子、信濃國鹽尻河野文子、下總國八生村小川高雄などと云ふ名も見える。

御花は古流、御茶は表千家で、何れも素人の域を脱して居たが身旣に藝者として立つて居る以上、藝に於ても決して人後に落ることを屑しとせず、唄に於て踊に於て優に一家を爲す丈けの素養を持つて居た。其中でも特に一中節に趣味を感じ、私は年を取つたら一中節の御師匠さんにならうか知らと云つて居たが、常磐津界の現況に

就て又少しく憤りを發する所あり、檜物町の家元は日本橋の御師匠さんだ、苟くも籍を日本橋へ置いて居る以上、先づ此の御師匠さんを立てゝ行かねばならぬと云うて、率先して常磐津日の喜會の組織に力を致し、最後まで其の發展に思を勞して居た。家元も亦深くつな子に信頼し、事大小となく擧げて之れに相談して居た。謙抑敢て自ら爲さんとする念がなかつた爲め、會の時でも浚ひの時でも、つな子は常に三味線の方へ廻はる、大概は上調子で納まつて居たが家元は『つなちやんが覺えて居て吳れさへすれば安心だ』と云つて何でも先づつな子に移して居た。德があつたにもよる事だらうが藝に信用がなくては迚も之れ程重んぜられるものではない。

此のつな子。すべての人に愛され又すべての人を愛して居たつな子。あれだけの才と素養とを持つて居れば當然新しい思想にかぶれ

て氣障な生意氣になりたがるものなるに拘らず、徹頭徹尾古い女を以て終始し又それを以て滿足して居たつな子。此のつな子は大正五年一月卅日、假初の風邪が因となり、臥褥僅に一週日にして此世を辭した。酸素吸入によつて辛うじて呼吸を安かならしめつゝあつた際にも『私未だ死ぬものですか、死んぢや詰らないワ、折角自分の止まる所を探し當てたばかりですもの』と云つて居たが、天命には勝たれず、忽焉として逝いて仕舞つた。

　つな子逝いて既に二年。墓石漸く苔滑かならんとして、而して諸人の追慕愈よ切なるものがある。築地本願寺の墓所へ行つて尋ねて見ると、『此方は生前餘程功德を御施しになつた方と見えます、御親戚の方が御詣りに御出でなさるのに不思議はありませんが、全く緣もゆかりも無ささうな方が、能く御いでになつては御華を御上げに

なつて居ます、不思議な方です』と云つて居る。生きて萬人に可愛がられ、死して尚其の愛を繫ぐ、つな子亦當に瞑すべきであらう。

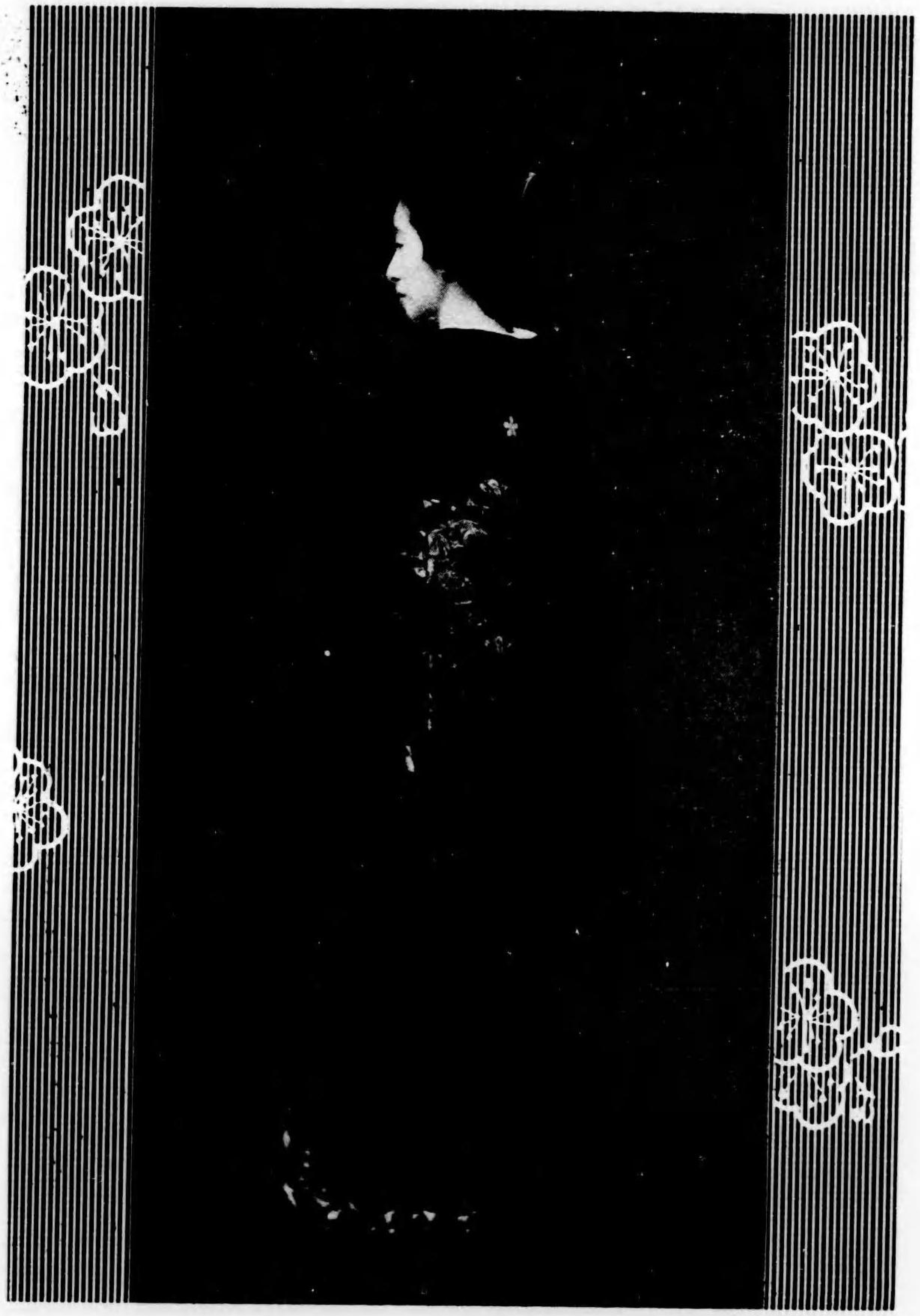
　簡單なる此の歌集は未だ以てつな子の全豹を明にする事は出來ぬ。只今茲其の三年の年忌に當り、何か記念になるものをと思つて草卒梓に上せたまでゝある。本當のつな子は此外に在る。少くともつな子に接觸した人の胸には今尚生きて微笑して居る。既に生きて微笑んで居るものとすれば、此書の不備不整頓亦敢て咎めらるゝに及ぶまいと思ふ。

大正七年一月三十日

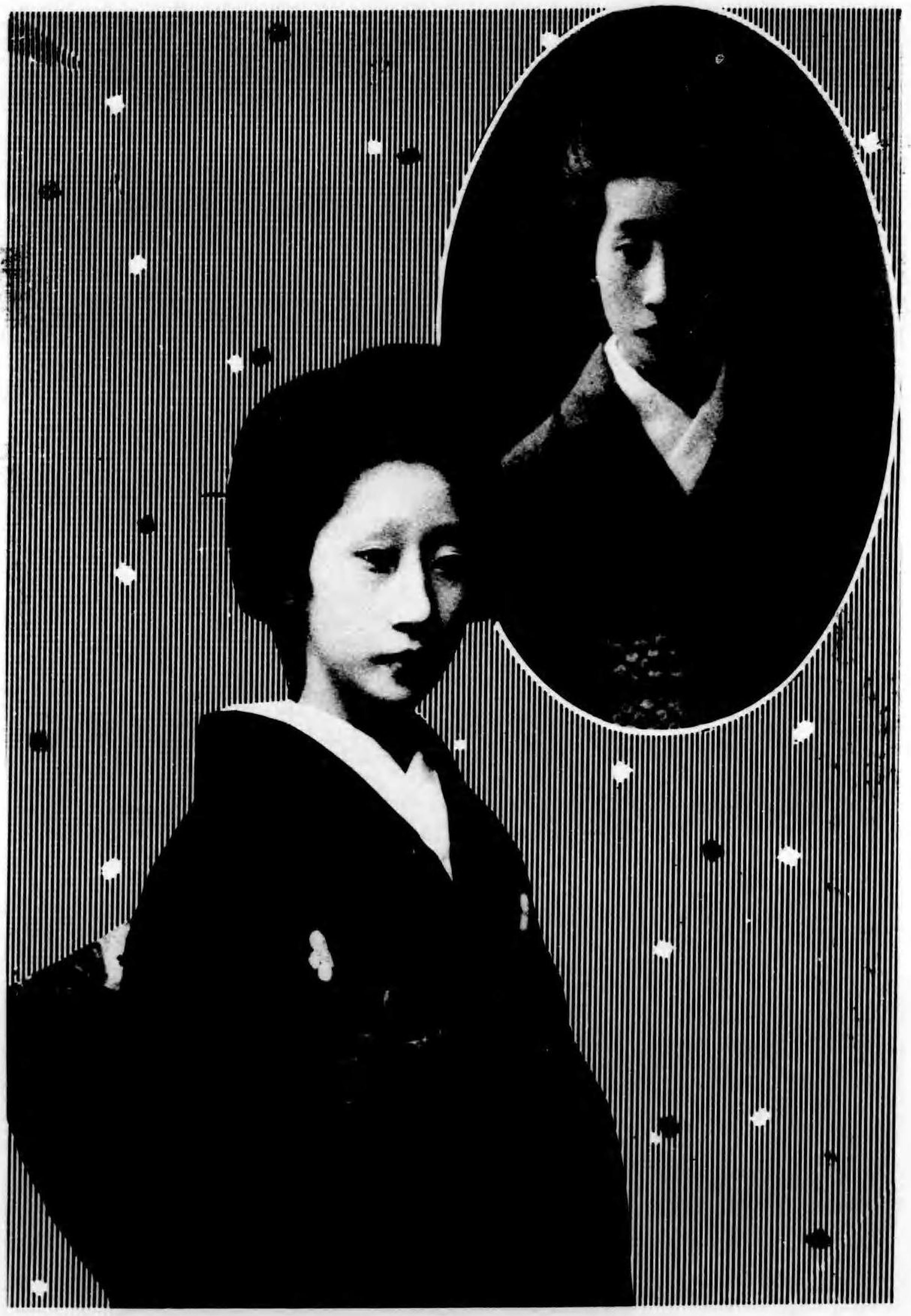
……くに子の十四歳……

……くに子の十五歳と十四歳……

……くに子の廿二歳……

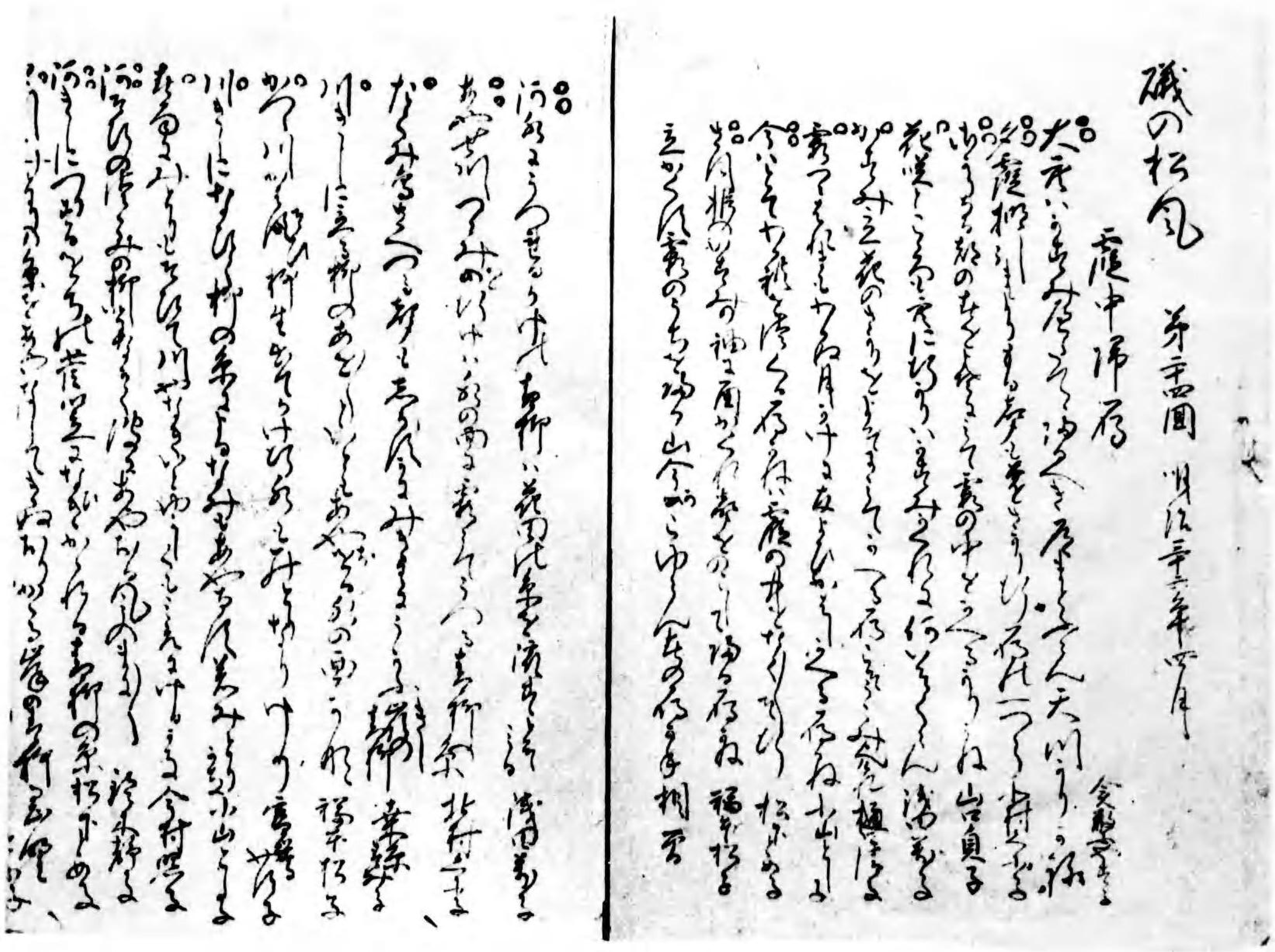


……くに子の廿七歳……

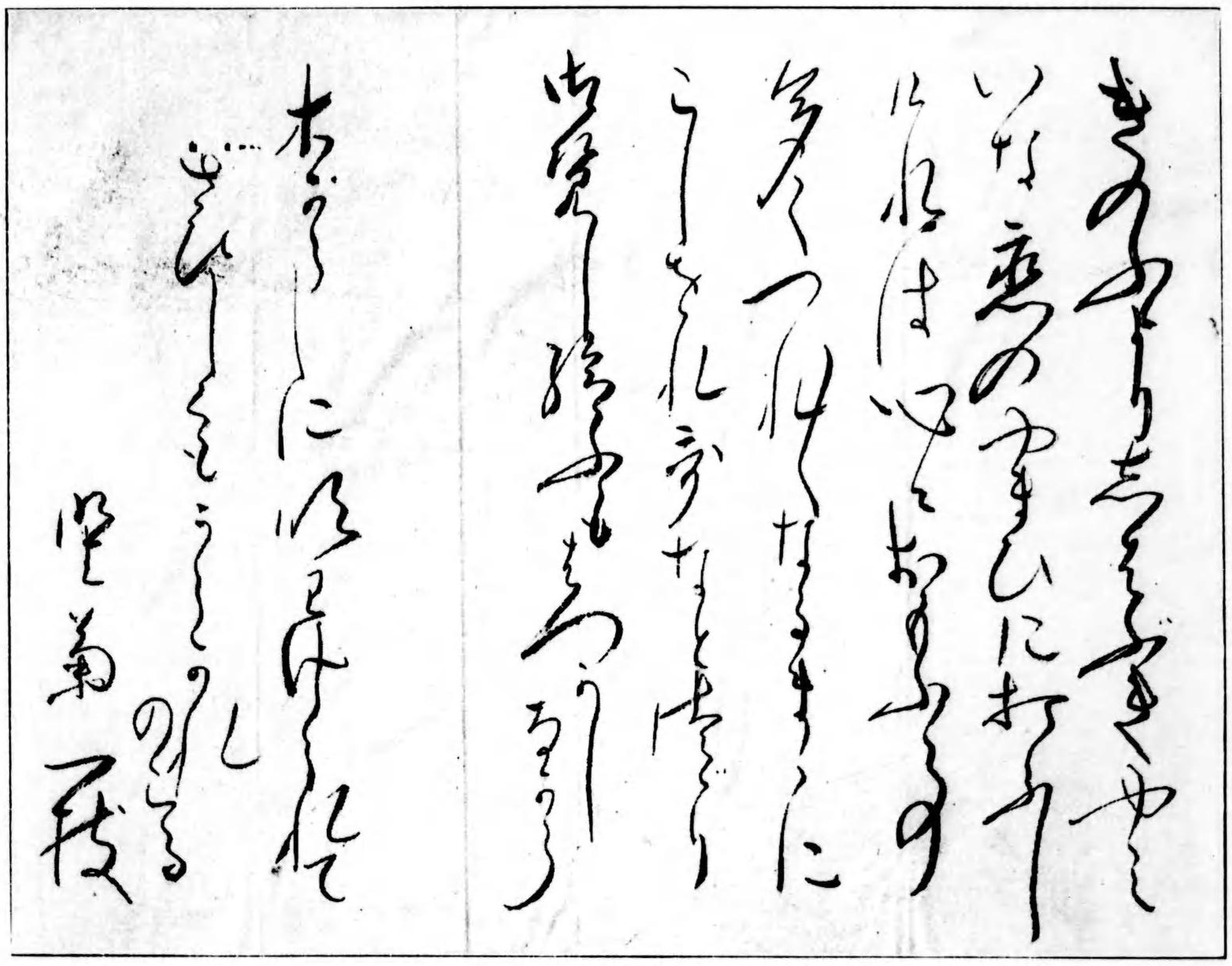


……くに子の廿九歳と三十歳……

……くに子の三十四歳……



……くに子の詠草……



……くに子の絶筆……

くに子詠艸

若水

若水に筆の命毛長かれと千代の言の葉書き流しけり

餘寒

朝くもり又雪さそふ空もよひ寒さいやます山の下いほ

餘寒月

春かとも思はれなくに風寒く見渡す雲に月そ冴えたる

松上殘雪

松か枝に巣こもるたつと思ひしは去年よりふりて殘る白雪

初春雪

冴えかへり山風寒く今朝よりは春ともわかず泡雪のふる

春雪

今朝よりも寒さ知られて散りかゝる花と見る間に消ゆる泡雪

梅香入閨

朝またき夢さめきはの閨の内に梅か香ふかく匂ひこそすれ

同

夢さめてうたて思ひの閨の内色なつかしき床の梅かな

田家梅

なつなはた深くも匂ふ賤か家の垣にゆかしく咲ける梅か枝

夕鶯

我庭の一むら竹に鶯のふしなれてなく夕くれのこゑ

竹間鶯

我宿の庭のくれ竹茂りあひて日毎なれくる鶯のこゑ

同

雪霜にかれぬくれ竹ちきりおきて庭にひねもす鶯のなく

野霞

若草の綠の色と見えつるは遠里小野の春かすみにて

海上霞

海人の子の聲はかりして靜けさの浪路に匂ふ春かすみ哉

松上霞

遠山の松もうすれてほの〳〵とおほひ渡れる春霞かな

朝霞

朝またきおき出て見れは嶺に尾にそこともわかす立つ霞かな

湖上霞

唐崎の水海きよく匂ふかな霞たなひく春ののとけさ

同

長閑さに比良の山風吹たえてさゝ波匂ふ春かすみかな

摘若菜

少女子はもすそぬらして春日野の雪間をわけて若葉つむらむ

山春暁

ほの〳〵としらみわたれる山のはの花の香ふかき春の暁

春曙

もゝ鳥の聲もかすみて花の香のしらみ渡れる春の明ほの

同

ありあけの影もうすれてほの〳〵と花の香ふかき曙のそら

同

鳥の音にねさめて見れは横雲もかすみにつゝく春の曙

山春曙

山のはは月もうすれてとりの音にほの〳〵あくる春の曙

山家春曙

山住は寒さなからも長閑さにほの〳〵あくる春のあけほの

早春風

長閑なる春の初風かよふらし池の氷のとけそめにけり

初春風

しのゝめにねくらを出る鳥の音も長閑にかよふ春の初風

浦春風

かすむ夜のさゝ波匂ふ月影にあかしの浦そ長閑けかりける

田家春雨

賤か家のせとに匂へるすゝなはた音しめやかに春雨のふる

庵春雨

梅の花のほころひにける夕より庵しつかに春雨のふる

春雨静

我宿の一むら竹の音たえて只しめやかに春雨のふる

夜春雨

小夜ふけて閨に入らんと思ふ間を音しめやかに春雨のふる

同

いつの間に雲や出てけんかすむ夜の軒端しつけく春雨そふる

雨中花

春雨のそほふる庭の櫻花又一しほのなかめなりけり

雨後花

むら雨のはるゝ山への櫻花香ふかく匂ふ春の朝風

雨後若草

いつのまに雨やはれけん我庭を見れはふたはにもゆる若草

水邊花

かつしかの綾瀬つつみの櫻花水の面ふかく咲き匂ふなり

夜花

久方の月なき夜半もなか〳〵に一しほ花の匂ひぬるかな

松間花

住の江の岸のしら浪松か枝にかゝると見るは櫻なりけり

花間春月

春の夜は雲と見まかふ櫻花木かけおほろにかすむ月かな

同

おほろ夜にをちこち山を見渡せは花の梢にかすむ月かけ

浦春月

こゝらふく嵐も今宵しつまりてまつほの浦の月の長閑けさ

閑居春月

ひるの間は野山に匂ふ春かすみ夜はおほろの月の影かな

同

野にすめは心長閑に立つかすみ夜半には月の影おほろなる

歸雁

くれなゐに棚引わたる春かすみ花とまかへて歸るかりかね

霞中歸雁

山のはに棚引わたる夕かすみ分つゝくるゝ雁の一つら

同

夕かすみ棚引くなへに聲おちて遠さかり行く雁の一つら

月前歸雁

春の夜の月も匂ひて櫻花ちるにまきれて歸るかりかね

同

さく花の雲間の月に聲ありておもしろさうに歸る雁かね

雨中歸雁

雨ふりて庭の櫻もちりかゝるうたて思ひにかへる雁かね

水邊山吹

吉野川なかれて早く行く春をとゝめ顔なる岸の山吹

山吹

立出てゝそゝろありきに庭見れはものなつかしき山吹の花

同

つれ〳〵に立出て見れは春の野に物あはれなる山吹の花

躑躅

足ひきの山下水も紅にさき匂ひたる花つゝしかな

同

春かすみ棚引わたる我宿の染井の里につゝし花さく

社頭藤

千早ふる神の御前の松か枝にぬさとかけたる藤の花ふさ

同

住よしの神のやしろに紫のゆかり色そふ藤浪の花

松上藤

松か枝の色そひぬると思ひしはゆかりに咲ける藤にそありける

松上藤

松か枝にかゝる藤なみ紫のとはりかけしと見ゆる今日かな

桃

長閑かなる霞たなひく小林になまめき匂ふ姫桃のはな

雛祭

少女子かかたみによりて睦ましく妹背むすふの紙ひいな哉

川柳

春雨にいとゝ色ます川やなきかけも霞める夕くれの雲

柳糸風靜

淺みとり見れはゆかしく青柳の糸も靜けくなひく春風

同

柴の戸をおし出て見れは春風に靜けくなひく青柳の糸

野春駒

久方のそらのとかなる習志野にむれつゝかける春の若駒

雲雀

長閑なる霞わけつゝうなゐ子の菫つむ野に雲雀なくなり

雲雀

野へ遠く菫つみつゝ立くれは飛ふかと見えて雲雀落ち來る

春夜蛙

春の夜のかすむと見れは月かけの小くらきかけに蛙なくなり

雉子

朝はらけ野へをし見れは若草にかきろひかねて雉子なくなり

同

野へ遠く行けは草葉の短かきに隱れかねつゝ雉子鳴くなり

岡雉子

かた岡の麥生かくれに鳴く雉子の聲もあはれに子を思ひつゝ

同

長閑なる夕日か岡の若艸につまを戀ふらん雉子鳴きつゝ

蝶

そこはかと立ちつる野邊のすゝなはた匂ひなからの蝶の遊へる

椿

庭の面にとはりかけしと思ひしは垣根に咲ける花椿にて

牡丹

おほとかに咲てゆかしく匂ふなりつゆもみたれぬ牡丹の花

蕨

折らはやと思ひてはたとためらひし若紫のかき蕨かな

菫

一人ゆく春の山田の細道にやさしく咲けるつほすみれかな

汐干狩

少女子かもすそぬるゝも厭はすに終日こゝに貝ひらふなり

惜更衣

なつ衣かふるは常のならひそと思へと惜しき花の袖かな

海邊首夏

百舟の眞帆に片帆に風吹きて青海原は夏めきにけり

同

雪と見し磯山櫻ちりはてゝ海原はやく夏は來にけり

雨中新樹

みつゑさす庭も小くらくなりはてゝ卯の花くたし降くらしけり

新樹露

花ちりて若葉すゝしく朝露のおくての柏風わたるなり

同

我宿の庭の楓に露おきてみつゑすゝしく風わたるなり

浦梅雨

かきくらし降るさみたれに須磨の浦岸打つ浪の音そさひしき

同

音たかくなるみの浦の浪の色も見えすなりぬるさみたれの頃

行路梅雨

山路行けはとちの木蔭の小くらきと思ふほとなく五月雨の降る

梅雨晴

さみたれの名残の露の玉すたれかゝくる軒に夕日さすなり

山家卯花

山かつに道をとひ來て夕闇も卯花月夜迷はさりけり

山家卯花

山深み雪かと見しはつゝらをり杣の細道さける卯の花

垣卯花

月かけかかつは雪かと思ふまて賤かかき根に咲ける卯の花

橘薫風

小すたれのゆらくを見れは夕風にさと打かをる軒の橘

軒橘

軒端ふく風に先たちかくはしく花橘の香こそ匂へれ

伊香保にて杜宇をきゝけれは

山々のおとろの中に來て見れはしけくも啼けるほとゝきすかな

山々に雲のかゝりたるを見て

朝またきおはしま近く出て見れは山又山にかゝる白雲

百千鳥なきけれは

おき出てゝ見れは青葉に風渡りこのもかのもに百千鳥なく

同

山里にやとりし居れは百千鳥ひねもすなきぬそこともなく

舟中杜宇

世のちりを離れて遠き浪枕ねさめすゝしくなく杜宇

夕郭公

夕月のかけ待をれは聲たかく先かけてなく郭公かな

月前水鷄

短夜の月を見つゝも立ち居れは戸さしねよとて水鷄なくなり

曉水鷄

ありあけのかけうすれゆく曉に人來とはかり水鷄なくなり

川螢

河そひの柳のふる葉ちることに光りみたれて螢とふなり

同

川風のうすものかろく吹くなへに舟はたあかく飛ふ螢かな

水邊螢

池の面にしけるうき草露深み光涼しく螢とひける

簾外螢

庭もせの露の光と思ひしは小簾こしに見し螢なりけり

夏雲

時の間に一むら雲の立わたり夕立さそふ風かよふなり

夏花

日さかりの青葉かくれに際立ちて紅匂ふ花さくろかな

夏月

むら雨ははれても殘る雲間より涼しく見ゆる夏の夜の月

同

をしむ哉すゝしき月の影としも見るほともなくしらむ大空

同

かたひらの袖吹とほす夕風に木の間もれくる月の涼しさ

竹間夏月

風わたり一むら竹のそよくたひすこしく見ゆる夏の夜の月

水邊月

水底もすめるはかりに見えにけり川つらあかくてらす月かけ

河夏月

すみた川くたす小舟の波のまも涼しく見ゆる夏の夜の月

夕立

涼しさの風のかよふと思ふまに木艸なひかし夕立のふる

川夕立

空さへも小くらくなりて川つらの水音たかく夕立のふる

同

川岸の柳のかけも見えぬまてかきくらしふる夕立の雨

同

ゐくひたに見えすなりぬるなつみ川しはし涼しく夕立のふる

同

夕立のしはしすくると見るほとにふしの河つら日かけさすなり

市夕立

遠方ははれわたれとも夕立のふるまにおそき市の菅かさ

柳蔭納涼

老柳木かけすゝしみ立よれは夕月みえて風わたるなり

池蓮

見るかきり蓮咲きけり池の面はうすくれなゐの香も深くして

田家蚊遣火

ほの見ゆる賤か軒はの夕顔の花の下かけ蚊やり立なり

松下泉

むすふ手も氷るはかりに心地よく夏の外なる松の下水

同

夏の夜の雲間の月のかけきよみ流れすゝしき松の下水

雨後棟

さみたれのすきてすゝしき小林に露のはえある花あふちかな

葭切

河きしにすゝみし居れは夕風のそよめく葭にたくみ鳥啼く

瀧

我袖もしとゝにぬれて瀧つせのみなわの流れ涼しかりけり

夏祓

千早ふる神にちかひて我罪をはらひしあとの袖そすゝしき

松風忘扇

松風の音をすゝしみ立出てゝもちし扇も忘られにけり

扇

暑さの忘るゝまてに手ならしの扇の風そ涼しかりけれ

蝙蝠

夕くれに集へる市の總角の聲するかたに蝙蝠のとふ

暑日

夏の日はけつる氷とりてしのきつゝ手なれの扇うちもおかれす

氷室

氷室山守る人我に身をかへてたへぬあつさを忘れさせてよ

同

あつさをもしらて過るも哀れなり氷室の山は冬のみにして

氷賣

日さかりに氷賣るなる賤の男の聲も涼しくきかれけるかな

晩夏

夏もはやくれかた近くなりぬれはやゝ秋風のかよひきぬらし

晩夏風

すゝしさも夏の名殘となりぬれはまたも秋めく風通ふより

晩夏風

涼しさは身にしむはかりなりにけりはや秋近くかよふ夕風

立秋

そよ風もかならす萩の上吹きてくる秋しるし三日月の影

立秋衣

今朝よりそ秋立ぬらし薄衣風すゝしくもなりにけるかな

同

秋もはや立ちにける哉夕風の袖吹きとほし身にそしみける

初秋

夏衣またかへなくに哀れ知る空吹きまよふ秋の初風

初秋夕

たそかれのかはたれ時の空見れはすゝろに秋はさひしかりける

初秋月

いつのまに秋めく空そ三日月はさひしきものゝはしめなりけり

初秋風

萩の葉に露もたまらす吹きかへし音さやかなる秋の初風

同

亂れちる露の萩原そよめきて小簾のひまもる秋の初風

初秋露

秋立てはや丶吹かはる夕風に庭の小草の露そみたる丶

同

立そむる秋また淺き薄月夜光をそゆる露の玉ゆら

早秋雨

昨日より夕風さへも身にしみて早くも秋の小雨そほふる

同

秋雨のはやふりそ丶き淋しさの軒打つ音の身にそしみける

秋雨

昨日けふまた染はてぬもみちはに夜すから雨のふりそ丶くなり

垣槿

朝ほらけ霧のまかきに露深く色のはえある朝顏の花

野萩

武蔵野のわか紫の萩の花露おもけにも打なひくなり

風前萩

音かはる秋の夕風身にしみて露の玉ちる萩か花つま

同

霧はれてふきもさためぬ夕風に露ちりかゝる野への秋萩

同

雨雲も吹きかへされて秋風に結ひもとめぬ萩の下露

雨中萩

うき雲のくもりみはれみ風立ちて小雨にぬるゝ秋萩の花

月前萩

照る月の夜な／＼やとる萩の葉のなひくをみする影のあはれさ

風前苅萱

秋風に吹かへされておく露もみたれかちなる野への苅萱

女郎花

たをやかに花のすかたも色めきて風にたふるゝ女郎花かな

女郎花

立こむる朝霧ふかくぬれ〳〵て打たれかみの女郎花かな

同

夕露の光すゝしき玉ほこの道になまめく女郎花かな

藤袴

ぬしやたれ若紫も色ふかくうつり香匂ふ藤はかまかな

同

ぬし知らぬたかうつり香のいとふかく紫匂ふ藤はかまかな

桔梗

朝露のふかく結ひて袖かきに匂ふゆかりのきちかうの花

同

生垣の千艸にましろ紫の一きはめたつきちかうの花

同

野へ見れは夕霧こめて露深くむらさき匂ふきちかうの花

撫子

我庭に植てみまほし露ふかき野へにはをしき撫子の花

蓬生

あれはてし野路のわら家の垣の上につはなよもきの生にけるかな

月前薄

夕月の影ほのかにもさし出てすゝきをしなみ打なひくなり

同

月影のさやかに匂ふ糸すゝき露おもけにも打なひくなり

草上露

夕まくれ秋の野風のさら〱と小草玉ちる露のあはれさ

同

庭もせの小草の上におきあまる露ふきみたす秋の夕風

蘆露

難波潟あしの葉てらす月かけに光すゝしき露の玉ゆら

山路霧

山そひの切とほしたるつくり道行手もわかす霧そこめたる

海邊霧

眞帆あけて行く大舟の影うすく沖の海原霧そこめたる

海邊霧

磯山の松もうすれて海原に秋霧ふかく立こむるなり

山家霧

谷ちかき山下いほの柴の戸ははるゝ時なく霧そこめたる

霧中擣衣

霧こめし外山の里に夜もすから哀れをさそふ衣うつなり

竹間秋風

杜かけの竹の小はやし音つれて秋ふけわたる風そ身にしむ

七夕夜

吹く風よ雨雲はらへたなはたの年に一度のあふ夜しなれは

同

いかはかり嬉しくやあらむ七夕の待ちに待ちへしこよひ一夜を

七夕後朝

立かへり天の川浪袖ぬれてなほ惜しまるゝ今朝の別れ路

魂祭

おもかけとつとよりそへは魂棚のけふりのみこそ立のほりけれ

秋山路

さひしさにひとり立出てのほり行く山路はあけに紅葉してけり

野鶉

さえわたる月にあくかれ野へ來れは尾花の下に鶉なくなり

野鹿

秋ふかみ枯野を遠み月清み夜半に妻こふさをしかの聲

曉鹿

うき秋をかこち乍らも明近くうらふれてなくさをしかの聲

同

入かたの月は殘れと山のはに聲かなしくも鹿のなくらん

閨扇

我閨に打もおかれぬ扇こそ涼しき秋の風かよふらめ

霜夜虫

庭もせにはや初霜もおく萩のかれ〳〵にのみ虫のなくなり

夜聞雁

なかき夜をかこちなからも一眠り夢おとろかす雁の聲かな

山家友

したはしき友と今宵は明さはや月すみわたる山したの庵

見草花

唐にしき見る心地して朝露になまめき匂ふ八千草の花

同

野へふかく見わたす限り八千草の露のはえある朝ほらけかな

古寺秋鐘

くたらよむ聲もほのかに入相の鐘にさひしき秋の山寺

萩寺にまゐりてよめる

さしくしの曉おきの露ふかく月に匂へる萩の花妻

月前虫

照る月のやとる萩原分け行きてさやけき虫の聲をきくかな

同

淺ちふのよもきの上の露しけく月にさえ行く夜半の虫の音

雨後月

秋さめのはれし名殘の露ふかく庭の木の間に月そさえたる

雨後月

雨はれて庭の草木も露ふかく見あくる空に月そさえたる

同

秋雨のはれわたりたる大空の光さやかに月そ出てたる

深夜月

秋の夜の月のかつらの影きよくふくれはいと〻てりまさるなり

江上月

秋の日もはやくれはて〻なかれ江の水しつかなる夜半の月かな

同

山もとの入江にうつる松か枝のかけさやかなる秋の夜の月

古郷月

すみすてし我古里もあれはて〻軒はあらはにてらす月かな

磯月

磯山の松ケ枝高くてりわたり浪間さやけき秋の夜の月

海上月

沖つ風吹きわたりたる海つらに光きらめく秋の夜の月

松間月

山のはの松か枝高く照りわたり月のかつらの影ふくるなり

同

そは山の千歳ものふる松か枝に高くもすめる月の影かな

水上月

秋雨のはれしと見れは里川の流もきよくうつる月影

林中月

秋ふけぬならの小林紅葉して照りそふ月の影そさやけき

草庵月

秋はなほ草のいほりの露しけく月かけはかり夜ことさすなり

山月明

ふくろふの聲さへすめる山の端をあらはに照らす秋の夜の月

同

さしのほるほとも靜けく山のはにはつかはかりに見ゆる月影

待月聞虫聲

待ほともなか月のかけさやかなる虫の聲きく秋の夜すから

待月聞虫聲

月影を待つほのくらき草原にこゝろありけに虫のなくなり

月あかき夜よめる

けたしわれうき秋とのみ思へはや月かなしくも見えにけるかな

月前薄

月かけのさやかに匂ふ糸すゝき露おもけにも打なひくなり

月前風

月かけのくまなき夜半のしのすたれひまおとろかす軒の秋風

月眺望

遠かたの松のむら山霧こめてたえ〳〵にのみ月の見ゆらん

残菊霜

きのふ見しまかきに残る白菊にけさはや霜のおきわたるなり

暮秋風

うらかるゝ木草の葉こと霜おきてそゝろさむけく秋風の吹く

初冬

何ものも未た整へすありけるをあわたゝしくも來ける冬かな

初冬霜

起いてゝあらふ手さきもつめいたく冬來にけらし庭の朝霜

時雨

ひそ〳〵と何かさゝやくことくにて楢の落葉に時雨ふりける

夕時雨

遠かたのくぬき林の夕時雨はれ行く方に雪の山のは

時雨雲

しくるやと心をおかぬ日とてなし人まとはしの冬の雲かな

夕霰

夕雲のしくると見しをうたてくも又おとろかす玉あられかな

行路霰

くもるとて道をいそけは山風のさきかけてふる玉あられかな

山家霰

山にすめは人も訪ひ來す板ひさし折々たゝく玉あられかな

霙

風さむみ雪けに見ゆる夕くれを時雨ましりの霙ふるなり

同

冬さむみ雪にはあらてうき雲のかゝると見れは霙ふるなり

落葉

神無月時雨をさそふ木からしに庭の落葉の舞ひ上りける

夜落葉

小夜ふけて鐘の音遠き閨の戸を落葉の雨のおとつれにける

落葉有聲

風ふけは朽ちしとほそにさら〳〵と木の葉の落る音しきるなり

月前落葉

ふくる夜の氷るかことき月影をかすめなからに降る落葉かな

池薄氷

ちりうかふ落葉なからに池水の結ひそめけり今朝のうすらひ

同

蘆の葉の折れふしゝまゝ池水の今朝めつらしくむすふ薄氷

枯野

花すゝき一もとたにも殘りなく枯野となりてむすふ朝霧

冬草

古里の淺ちか原のおくつきの雪に埋るゝ薄一もと

田殘雁

小山田も今朝はましろに雪ふりてつはさも氷る雁の一つら

湊千鳥

朝ほらけあまたより來る湊舟先かけてなくむら千鳥

江水鳥

難波かた入江にあそふをしかもの聲も寒けき朝ほらけかな

池水鳥

氷る夜をものゝ數ともなさすしてつかひ離れぬ池のおし鳥

夜神樂

小夜ふけて袖も寒けきはふり子かとるさかき葉に霜やおくらん

閑居冬月

淺ちふの庭も木のはのちりつもり深き霜夜の月の影かな

寒夜衾

さえかへり雪ふりつもる冬の夜のかつけと寒きあさて小ふすま

夕雪

入相の鐘の音さひしき夕暮に又一しきり白雪のふる

同

たそかれのかはたれ時の庭もせの小篠か上にふれる白雪

同

夕まくれねくらにかへる鳥さへも氷るはかりの庭の白雪

竹雪

わか庭のいさゝむら竹むら〳〵と折れふすはかり積る白雪

初雪

木からしの音たえ果てゝ見わたしの松の梢に白雪のふる

山初雪

遠山の嶺の松原白妙に今朝めつらしく初雪の降る

山雪

みよしのの吉野の山も白妙に木々の櫻間つもる白雪

月前雪

宇治川のあしろに白く雪ふりて水の面きよくてらす月影

海邊雪

雪ふれば松原つゝき海なへて只ましろにそ見えにけるかな

驛路雪

里の子のかけさへ見えすなりにけり關の驛路雪にうもれて

曉天雪

旅人の曉かけて越ゆるなる小夜の中山雪ふりしきる

冬月

木からしのふと吹きやみし高とのに氷るはかりの月影を見る

浦冬月

須磨の浦浪路のはての雪そらにものすさましく氷る月影

寒夜月

戸の外は身を切るほとの寒さにて月のみひとりさえわたりけり

寒山曉月

嶺近くましらの叫ふ聲もして月にあけゆく冬の山里

月照寒草

いさゝ川川邊の雪のむら消えて枯れし蓬を月てらすなり

向爐火

あたらしく化粧終りて人を待つ閨の埋火なつかしき哉

庭早梅

霜深く春また知らぬ庭もせに冬木の梅のかをりそめけり

同

白雪のきえのこるかと見るはかり花さきそむる庭の梅か枝

炭竈

白雪に埋れ果てし山もとの里に炭やく煙たつなり

年欲暮

かにかくと今年も暮にせまりける未た何事もなし終へすして

歳暮

市人のいそかはしさを餘所に見て長閑にくるゝ我が今年哉

同

瀬を早み月日流れて今は又せきとめかたき歳の暮かな

春已ト隣

來る春に幸多かれと祈りつゝ今日の一夜を待ちあかすらむ

戀

君ゆきてふすまに殘る移り香を夜毎にひとり戀わたるかな

戀扇

春の夜のおほろ月夜にしくものと扇はかりをかたみとそ見る

秋戀

秋の夜の露のなさけにぬれ衣ひたすら袖のかわくまもなき

契戀

若葉より生立てられし紫のゆかりの色そ契り深しや

恨戀

つれなくもよそにうつらふ八千草の花の白露かわく間もなき

初戀

思ふより知らぬ戀路に分入りてうひ山ふかに亂そむなり

忍戀

人知れす忍ふる身こそはかなけれ宵々ぬらすかたしきの袖

同

こひ〳〵てくゆる思ひも下にのみ忍ふる身こそうたてかりけれ

同

身を忍ひ忘れぬはやとおもほへは袖もしとゝに涙せきあへす

同

よる〳〵の人静まれる閨の内忍ひ音になく身こそはかなき

夢中戀

玉手まきうれしと見つる夢さめて泪せきあへぬひとりねの床

寄海戀

海人のやく藻汐ならねと人知れす戀ふれはからき思ひなりけり

惜名戀

なか〳〵に戀しき君を思ひ川渡らはをしき名をや流さん

不逢戀

共に見し月は昔の月にして秋はさひしきひとりねの床

雨中戀

もろともにぬれて嬉しき雨の夜のなけの情の契ふかしや

相思戀

行末も深き契りとなれ衣うらなき中そたのしかりける

同

をし鳥のつかひはなれぬ我戀もうきねにあらぬ中そうれしき

寄筆戀

待わひて人のとはねは書く文の筆の命毛もとかしくして

夏忍戀

夕くれのかはたれ時の淋しさにひとり忍ふの袖そ露けき

祈戀

戀しさに日毎夜毎のいなり山神に祈りをかけてけるかな

寄鏡戀

曇りなき君に心のます鏡うつらはいかに嬉しかるらむ

春戀

春と云へと袖はかわかすうき人を戀ひつゝわふる我そうたてき

寄浦戀

下ひもの夕日の浦の月影はみしまにかくる雲のかけはし

同

ほのかにもみしまの浦の白波に引のこしける櫻貝かも

冬戀

君やむときゝしあしたの風寒み身にしみしみと戀心地して

曉寢覺

さしくしの曉くらき夢さましほからからかになく山からす哉

同

燈火のまた消えやらぬ曉に閨の戸あかくのこる月影

猫

我宿の手かひの猫のむつれあふわか妻こひに夜をふかしけり

櫻のちりけるをわひしと思ひて

此ほとは靜心なき櫻花ひたすら散るそわひしかりける

遠村煙

夕くもの消えぬと見れは遠近の賤か伏屋に煙たつなり

百合花

我庭の小艸茂りておく露に薫りも深く匂ふ白百合

同

茂りあふ野邊の草葉の露ちりて色香もふかき山百合の花

蝸牛

ふる雨に身をかくしつゝ庵をはかつきてありくかうつふりかな

稲妻

遠里の松の木の間もほのめきて光とゝめぬ宵の稲妻

海

朝ほらけするかの沖に波立ちて雪かとまかふ富士の根おろし

嵐ふきけれは

ゆふへより閨にも入らすあらましき風をおそれみ立さわくなり

窓前竹

夕立のふりしと窓をおしあけて風になひける呉竹を見る

瀧の川にまかりてよめる

池とのに端居し居れは枯わたるはちすの下にあしかもの鳴く

鷺

難波潟あしのひまなく飛ふ鷺のゆくへも見えぬ夕くれの空

浦鶴

夕汐のみつるはるかの沖越えて和歌の浦鶴鳴きわたるなり

橋上苔

行かへる人しなけれは苔むしろ露の玉はしおきわたすなり

同

住すてし我古里の朽木橋苔むしけるを渡りても見る

名所海

よさの海のあそひの浦の波風に雲おもしろく匂ふ月影

弓

梓弓ま弓つき弓おしかへしゆるふかたなき御代にもある哉

梅香と花子とを見て

あなをかし梅と櫻の咲きましり皆人ことにあこかれ來ぬる

梅香に祝おくるとて

今日見れは昨日にまさる梅か香や千代ふる後もなほかくてこそ

人の忌に

なけきわひ過る月日も夢の間にはや三とせともなりにける哉

別れし折をおもふ

去年の今日別れし時の悲しきに又ひちまさる我泪かな

うひ子生れ給ひし祝に

年たゝはいかに色こそ深からめ根さしもことに見ゆる姫松

契りし友のもとに

睦ましく結ひかはせし綱手なは引かれはなるゝ身こそうたてき

懐旧

ほとゝきす啼くにつけても思ふかな去年の別れの忘られぬ夜を

伊勢の愛子の君へ

山川を隔てゝ遠き君なれは愈よ見まく思ひこそすれ

寄源氏物語戀(夕顔)

あらき風ふせてかひなく枯はつる契り短かき夕顔の花

おなしく若紫

山の井のふかくも人を思ふかな若紫のなかき契を

おなしく花散里

うらなくも物いひよらん人もなく花ちる里の宿そわひしき

おなしく桐壺

たくひなく君の御心かけしよりはかなく散りしその花桐

おなしく空蟬

うす衣おきてもぬけし空蟬の心は君に音をのみそなく

大正七年一月廿八日印刷
大正七年一月三十日發行

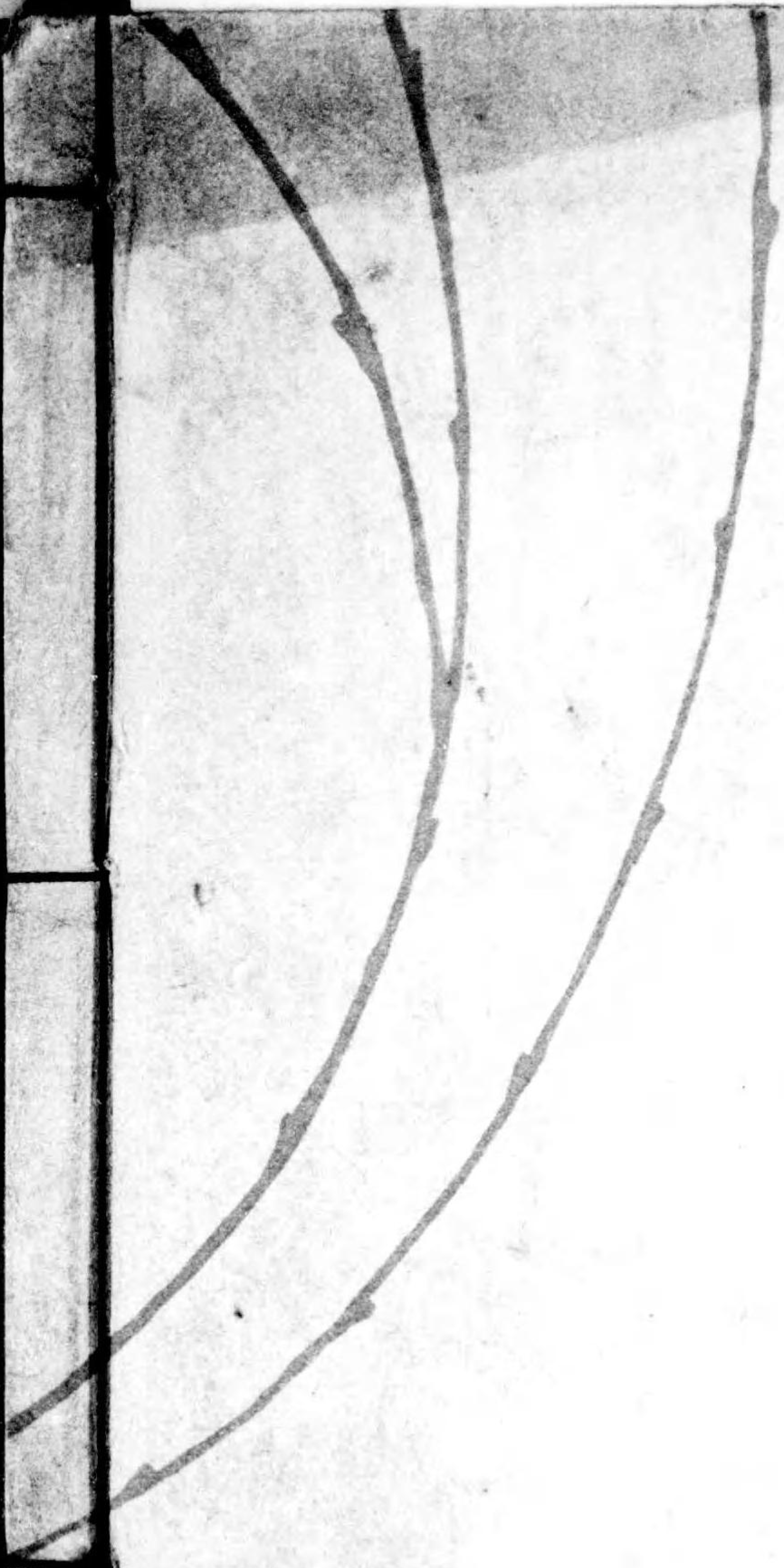
非賣品

編者　松本忠三
東京市日本橋區數寄屋町二番地

發行者　北村なみ
東京市本所區番場町四番地

印刷者　飯島省一
東京市本所區番場町四番地

印刷所　凸版印刷株式會社本所分工場

273
071

終